

同時代史学会 News Letter

第 17 号

(2010 年 11 月) ISSN 1347-7587

2010 年度年次大会に向けて

転形期—1968 年以後

及川英二郎(東京学芸大学)

今年度大会では、現在にまで継続する諸問題の系譜を歴史的に検証する試みの 1 つとして、1960 年代から 1980 年代という、やや長期的な時間設定のなかで、社会運動の転換と社会制度の転換とが、いかなる関係性をもって推移したのかといった問題を考えたい。前者の社会運動の転換については、安保闘争やベトナム反戦運動など、60 年代を通じた高揚が、ある種の敗北を経験するなかで、新たな視点や態勢が獲得されていく 70 年代の動きが核になるだろう。そして、その後、相互に連携しつつ、また緊張感をもちながら展開された諸運動が、いかに推移していくのかといった問題を、沖縄の本土復帰や在日朝鮮人、ウーマンリブなどの動向に注意しながら考察したい。また、後者の社会制度の転換については、いわゆる管理社会化やシステム化が進展する現代社会の趨勢のなかで、前者の社会運動の転換をいかに受け止めていくのか。それが 80 年代に全開する新自由主義的な動向といかに連動するのか、といった論点が重要となるだろう。

同時代史学会 2010 年度年次大会

転形期—1968 年以後

日時 : 2010 年 12 月 4 日 (土) 10:00 ~ 17:30 (9:30 受付開始)

会場 : 成城大学 3 号館 311 教室

(小田急線成城学園前駅下車徒歩 5 分)

午前の部 (10:00-12:00)

報告 1 : 高橋順子氏 (日本女子大学)

「復帰」前後における「沖縄学習」からみた沖縄認識の変容
——日本教職員組合教育研究全国集会を中心に

報告 2 : 水溜真由美氏 (北海道大学) フェミニズムとアジア

コメント : 加藤千香子氏 (横浜国立大学)

総会 (12:50 - 13:20)

午後の部

第一部 聞き書き (13:30-14:20)

川満信一氏 (元沖縄タイムス)

復帰と反復帰——それ以後 (仮題)

第二部 報告と討論(14:30-17:30)

報告 1 : 丹羽美之氏 (東京大学)

テレビが見つめた戦後日本

—1970 年代のドキュメンタリー番組を中心に

報告 2 : 中北浩爾氏 (立教大学)

市民参加と市場競争のあいだ——日本型多元主義論の歴史的位相

コメント 1 : 古矢旬氏 (東京大学)

コメント 2 : 未定

※大会終了後、懇親会を予定しております。

資料代として 500 円を申し受けます。

1960年代における新右翼の形成と表象

——大江健三郎から三島由紀夫へ——

梶尾文武（日本学術振興会）

この発表は、1960年代に台頭した「新右翼」の行動と、同時代の文学的想像力との関係を明らかにすることを目的としている。同時代の文学は、右翼青年の行動をどのように活用しイメージ化したか。あるいは逆に、新右翼の思想と行動は、その背後にいかなる文学的な情念と想像力を宿していたか。議論の中心に置くのは、大江健三郎と三島由紀夫、60年代の文学を牽引したこの二人の小説家のテキストである。

一般に「新右翼」の弁別特性として挙げられるのは、次の三点である。第一に、新右翼は、60年代に形成された新左翼学生運動に対する対抗運動として発生した。第二に、51年結成の大日本愛国党に代表される既成右翼の親米反共路線に対し、新右翼は「憲法改正」あるいは「安保破棄」を主張し、反共のみならず反米を基本姿勢としている。第三に、学生層を主な担い手とする新右翼運動は、66年の「生長の家学生全国連合会（生学連）」および「日本学生同盟（日学同）」の結成をもって始まったとされる。草創期以来、学生右翼の庇護者として振舞ったのが、のちに見る三島由紀夫であった。

ところで、学生層の組織化に先駆けて新しい世代の右翼の出現を印象づけたのが、60年安保直後に立て続けに起った二つのテロ事件であった。安保闘争の余燼冷めやらぬ60年10月12日、17歳の元愛国党員・山口二矢は、日比谷公会堂で演説中の日本社会党委員長・浅沼稻次郎を刺殺した（浅沼事件）。翌61年2月1日、同じく愛国党に所属した経歴をもつ17歳の少年・小森一孝は、中央公論社社長・嶋中鵬二宅を襲撃、社長夫人と家政婦を殺傷した（嶋中事件）。この事件は、深沢七郎の小説『風流夢譚』を60年12月号の「中央公論」が掲載したことに対する反発に端を発する。『風流夢譚』は安保闘争の高まりのなかで天皇一家が処刑される場面を描き出す小説であった。

深沢七郎と並んで一連の事件の当事者となった小説家が、大江健三郎である。嶋中事件の発生直前、大江は山口二矢をモデルとする小説『セヴンティーン』二部作を著した（『文学界』61・1～2）。主人公は、自分は何者かというアイデンティティをつかみあぐねる17歳の少年「おれ」である。自己の同一性の空白を一挙に充填する対象

として見出され、彼に性的な享樂をもたらすのが、天皇という絶対者であった。

後半部『政治少年死す』には、大江自身を髣髴とさせる南原征四郎という学生あがりの進歩的な作家を、主人公が恐喝するという場面が配されている。興味深いのは、小説のクライマックスをなすべき「委員長」暗殺の場面に限って、小説の語り手が第三者に交替している点である。私の解釈では、主人公を「きみ」と呼ぶこの第三者の語り手は、南原である。「委員長」の暗殺場面は、小説が浅沼事件に取材するものである以上、作品全体のクライマックスをなすべきところだろう。ところがその場面は、事件のメディア像の小説家南原による分析という形式を採ることによって客観化される。大江自身を髣髴させる作家南原征四郎の散文性は、主人公の暗殺事件という審美的な高揚感を抑圧するのである。

事件後、語り手は再び「おれ」に戻り、収監された彼は自殺を決意する。主人公の死後、小説の終りには、「死亡広告」と題された詩篇が配されている。散文によって抑圧された主人公の英雄的行動とその「オルガスムス」は、主人公の死後、作品の末尾に一篇の詩として回帰するのである。詩と散文のこのような交錯は、右翼の英雄的なテロに対して、戦後民主主義の正統な後継者たらんとした大江が募らせる共感と反撥のアンビヴァレンスを端的に表出している。

三島由紀夫は、二・二六事件の「外伝」たる『憂国』（「小説中央公論」61・1）を著すことで、右翼テロルが席捲した同時代の文脈に介入する。この小説の主人公・武山中尉は、同志が決起し「叛乱軍」の汚名を着せられると、彼らを討たねばならない立場に追い込まれる。切腹を決意した彼は、それを見届けるよう新婚の妻麗子に申し出る。主人公は「自分が憂える国」が「果してこの死に一顧を与えてくれるかどうかわからない」ことをよく自覚している。しかし主人公は「それでいいのである」と思いません。中尉は天皇に代わって妻に見まもられながら死ぬことに官能的な喜びを感じ、「肉の欲望」と「憂国の至情」との幸福な一致を確信していたからである。

ただし注目すべきは、クライマックスをなす割腹の場面が、麗子の知覚のフレームを外したかたちで提示されることである。むしろ麗子は切腹する夫から目を背けており、一連の叙述はいずれも彼女がそれを見たという構えのもとにはない。このとき、描写された中尉の身体は彼女の知覚を経由せずより直接的に読者へと呈示され、主人公の腸はいわばこちら側へと「嬉々として」沁り出てくるのだ。『憂国』はこのような眼差しの配置のうちに、大義ある死を官能的な快樂と結びつけ、『セヴンティーン』の大江が抑圧しようとした英雄的な行動のエロスを直接的に解放するのである。

ところで、二つの右翼テロルを受けて著された橋川文三の論文「テロリズム信仰の精神史」（「思想の科学」61・3～4）は、戦後民主主義的な思考枠組のなかでは「思

想」以前の「信仰」にすぎないとして排除される右翼の論理を内在的に検証している。橋川はここで、二・二六事件に際して叛徒の汚名を着せられた皇道派将校・磯部浅一が遺した獄中日記に注目する。橋川はここに「絶対の探求者が、その絶対者によって徹底的に拒絶され、断罪された場面」を看取する。橋川によれば、皇道派のいうところの「天皇大権」が天皇自身の名において否認されたという事実は、天皇という絶対者への帰依が悲劇的にもその根拠を持ちえないことを暴露したのである。

このように論じた橋川によれば、戦後における天皇の人間化は、右翼テロルの神学的基礎の解体を決定付けるものであった。したがって「戦後日本のテロリズム一般について、問題を「神学」的に考えるよりも、心理的ないし「審美」的に考えることにいっそうの適切さがある」と橋川は指摘する。橋川のこうした分析は、同時代の右翼テロの歴史的な由来ばかりでなく、テロリズムの文学的表象がエロスという領域に接することの必然性を明らかにしている。すなわち大江と三島の、性というもっともプライベートな領域と結びついた右翼テロルの表象には、戦後的テロルにおける公の大義の喪失が反映している。そしてこののち、戦後民主主義の正統な後継者たらんとした大江とは対照的に、三島はみずから美的テロルの担い手として行動に進んでゆくことになるのである。

『憂国』から約5年後、三島は短篇『英霊の声』（「文芸」66・6）を著した。作中には、磯部浅一を髣髴とさせる青年将校が英霊として憑依する場面が配されている。天皇が「人として」ふるまうことを呪う彼の言葉は、戦後の人間宣言に先んじて二・二六事件の段階ですでに天皇が神格的な絶対性を失っていたという認識を表している。ただし、そのような天皇の脱神格化・人間化の由来を、天皇自身が暴力否定という人間的な論理、いわばヒューマンイズムの論理に屈したことに求めるところに、三島固有の洞察があった。三島によれば、「荒霊」がなす聖なる暴力、あるいは聖なる死を受け容れる力を失ったときから、天皇の人間化が始まったというのだ。

三島が『英霊の声』を著したのは、草創期にあった右翼学生運動との関わりを持ち、実際の行動に身を挺し始めた時期にあたる。ただし、初期日学同は、共産主義に対する対抗軸にあくまでも「民族」を据え、「民族」という政治的範疇に思想形成の契機をもとめていた。ところが70年代以降の新右翼は、「天皇」あるいは「天皇制」という美学的範疇に重心を移してゆく。私の見通しでは、この変移に際して決定的な影響力を及ぼしたのが、「文化防衛論」（「中央公論」68・7）から割腹へと至る三島の理論と行動であった。

三島はここで、右翼の戦略論として民族主義を言挙げすることの必要性を斥け、民族的差異を強調する民族主義が、むしろ日本においては「非分離を分離へと導こうとする」左翼的な言説戦略の枠組にしか収まりえないと主張する。三島が「民族」に代

えて強調するのは、表題のとおり「文化」という範疇である。三島によれば、文化とは「芸術作品のみでなく、行動及び行動様式」をも包み込む全体的な「フォルム」であり、それをもたらす「源泉の主体」として位置づけられるのが、天皇にほかならない。三島の構想によれば、天皇という「源泉の主体」からあらゆる価値が流出し、個人はその流れを汲むことによって「創造的主体」たりうるといふ。個々の死の榮譽は天皇を中心とする「文化の全体性」によって担保され、また逆に、個々の崇高な自己放棄こそがその「全体性」を実現するために必要とされるというのだ。70年の三島の死は、かような意味での「文化の全体性」が回復される瞬間を招来するためのものであった。この虚構的な論理を現実へと押し広げようとする不可能な行動によって、三島はみずからの文学を貫徹したのである。

〈冷戦〉の磁場と「アメリカ」

—冷戦期における大岡昇平の軌跡と『レイテ戦記』—

金志映（東京大学・院）

はじめに——〈冷戦〉と「アメリカ」の記憶

戦中から戦後の占領期、高度成長期を通して、アメリカをめぐる共同体の記憶はどのようにして形づくられ、語られ、変容してきたのだろうか。吉見俊哉は、占領期まで「軍事的な暴力と消費的な欲望が表裏になった占領者」としてあったアメリカが、五〇年代以降の本土日本では「基地や暴力との直接的な遭遇の経験や記憶から分離され、メディアを通じて消費される豊かさのイメージとして順化されていった」と指摘する。その背景にあるのは、社会主義圏に対する軍事的な基地の役割を韓国・台湾・沖縄が担い、本土日本はもっぱら経済発展の中核としての役割を担わされた、東アジアの冷戦構造であると分析される〔『親米と反米——戦後日本の政治的無意識』(岩波書店、二〇〇七年)〕。従来の戦後文学研究においては、占領期の「アメリカ」がもっぱら注目されるが、こうした指摘は、冷戦期が、アメリカをめぐる共同体の記憶に決定的な変容と断絶をもたらした時期であったことを明らかにする。また同時に、そのようなアメリカ・イメージの展開が、〈冷戦〉が日本の戦後意識のなかで曖昧にされてきたことと、表裏をなすことをも示唆しているだろう。ゆえに〈冷戦〉からアメリカを問うことは、戦後をめぐる歴史認識の再考にもつながると考えられる。

以上の認識から、本報告では、アメリカとの関わりを軸に、大岡昇平の冷戦期の軌跡を取り上げ、〈冷戦〉が文学テキストが生産される場と、その語りにも如何に介在したか

を考察した。大岡昇平は、戦中に暗号兵としてフィリピン戦線へ送られ、米軍の捕虜として収容所を経験した経歴がよく知られており、この体験に根を下ろした『俘虜記』（合本一九五二年）、『野火』（一九五二年）、『レイテ戦記』（一九七一年）などの作品は、戦争文学の正典として、戦後文学史にその地位を確立している。文学が共同体の記憶が共有される場であることに鑑みれば、これら作品の語り、戦後の歴史観の在り方に及ぼした影響は決して小さいものではないだろう。そこで注目されるのは、戦後史全体から太平洋戦争を振り返る『レイテ戦記』の「エピローグ」が、〈冷戦〉への鋭い視点を提示している点である。一方で、この作家は、占領終結直後の一九五三年に、ロックフェラー財団から資金を受けて米欧留学に出ることで、文化冷戦の場に身を置いていた。〈冷戦〉をめぐるこのような二つの場を見渡すことで、戦後文学における「アメリカ」を、〈冷戦〉の場において浮かび上がらせてみたい。

一、文化冷戦の磁場——ロックフェラー財団研究員留学

土屋由香は『親米日本の構築——アメリカの対日情報・教育政策と日本占領』（明石書店、二〇〇九年）において、日本を西側反共同盟の「新米的な民主主義国」とすべく、占領終結時に、GHQの民間情報教育局及び陸軍省から国務省へ、情報・教育政策の引継ぎが行われたことを明らかにしている。こうした事実は、軍事的、政治的な冷戦が、そのまま文化の領域に持ち込まれたことを意味するが、ロックフェラー財団の留学制度は、冷戦秩序構築の只中にあったこの時期に、本土日本における対日政策の重心が、軍事から経済・文化の領域へと移るなか、文学の領域が、俄かに文化冷戦の場として浮上したことを映し出す。

一九五一年一月、対日講和条約締結の下準備のために派遣されたダレス特使一行の文化顧問として、ロックフェラー三世が来日し、占領終結後に望まれる新たな文化政策について報告書をまとめた。多岐にわたって構想された文化交流事業は、米国務省や総司令部外交局によって検討され、民間組織が担うべきとされた留学制度は、ロックフェラー財団が受け持つことになる。こうして、文学者を対象として一年間の渡米を支援する、ロックフェラー財団研究員留学制度（creative fellowship）が立ち上げられた。一九五三年には、第一回生として福田恒存と大岡昇平が選ばれ、以後六〇年代までに、石井桃子、阿川弘之、中村光夫、小島信夫、庄野潤三、有吉佐和子、安岡章太郎、江藤淳など、戦後を代表する多くの文学者がアメリカへ送られることになる。こうした文化交流事業の成立に、冷戦体制の政治的な要請が強く働いていたことは疑いえない。ただし、制度に関わったさまざまな人物の立場がそれぞれに異なったために、構想の段階から政治的な思惑と相互的な文化交流の理想が複雑に絡みあい、実際の留学は冷戦の政治性にのみ収斂しないものとなったこと、また財団側の柔軟な方針

により、各々の留学の体験が多様なものとなったことは、併せて強調しておくべきであろう。

留学を記した紀行文『ザルツブルクの小枝』（一九五六年）や、『萌野』（一九七三年）における後年の回想にみられる大岡の言論からは、彼が敢えて文化冷戦の磁場に身を置きながら、留学制度を利用するしたたかさをもっていったことが窺われる。「サンフランシスコの単独講和が、沖縄と民主主義の犠牲において成立した時、アメリカの金を貰って旅行すること」の「後ろめたさ」を語った大岡は、政治・軍事的な出来事と文化留学に通底する政治力学を見抜いていたのだろう。その上で彼は、海外渡航が不自由であった占領直後に、「西欧的教養に磨きをかける」ために留学を選択し、アメリカに六ヶ月、ヨーロッパに七ヶ月滞在した。大岡の関心は、始めからアメリカよりもヨーロッパに向かっていたようだ。

帰国してからの大岡は、留学資金を貰ったことを理由に挙げ、アメリカに対する批判的言論を差しあたって控えると言明した。これは、留学が表現を拘束する方向に働いたことを示しているようでありながら、「自己規制」を明言することで、言説や文学表象の上に働く文化冷戦の磁場に注意を促すものとも読める。〈冷戦〉が文学テキスト生成の場に深く入り込んでいたことを認識し、この時期に書かれた文学テキストを、日米相互に力が働く場として捉える視点が必要といえる。

二、〈冷戦〉と『レイテ戦記』の語り

戦後文学を代表する戦争の語りとされる『レイテ戦記』は、一九六七年一月から一九六九年七月まで『中央公論』誌上に連載され、一九七一年に修正加筆を加えた単行本が中央公論社より上梓された。この作品に対する従来の読みは、概ね「事実之歌わせた死者への鎮魂」だとする作者の発言をなぞるものといえる。これに対し本報告では、最終章「エピローグ」において大岡が、太平洋戦争をみる独自の視点を同時代読者に向けて強く打ち出していること、その記述の方向性や作者の歴史認識に〈冷戦〉の介在を看取できることを論じた。

『レイテ戦記』「エピローグ」は、東アジアの戦後に射程を広げ、その広い枠組のなかに太平洋戦争を意味づけている。その語りは、戦中から作品執筆時の時点に至るまで、米国が極東政策を通じ一貫してアジアに関与してきたとする視点に立ち、その展開のなかの出来事として、太平洋戦争以降の日比両国の現代史を提示する。日本とフィリピンを包み込む東アジアを一続きの空間として捉え、アメリカを批判の中心に据えながら、太平洋戦争の戦後処置を通して冷戦体制として再編された東アジアの歴史的時空間を問うているのである。このような語りの意図は、ベトナムで冷戦に発する熱戦が継続する中、日本では「アメリカの極東政策に迎合して、国民を無益な死に駆

り立てる政府とイデオログが再生産されるという、退屈極まる事態が生じた」とする同時代状況に照らせば明白であろう。戦争と〈冷戦〉が、アメリカの極東政策のもとで連続することを浮き彫りにし、太平洋戦争の過去と〈冷戦〉の現在とを繋げる再記憶化を呼びかけて、同時代に警告を発しているのである。

文学表象のなかに見出される〈冷戦〉の痕跡に注目した先駆的な研究である丸川哲史『冷戦文化論——忘れられた曖昧な戦争の現在性』（双風舎、二〇〇五年）が指摘したとおり、戦後文学において〈冷戦〉を描いた作品は数が少ない。そのようななか、『レイテ戦記』は東アジア冷戦体制を構造的な視点から捉えている点で突出しており、そこから時代への介入を批判的に試みていることも、改めて省みられるべきであるだろう。他方で、『レイテ戦記』の語りは、冷戦期アジアの構図を反復し、なぞるような性格を併せ持つと思われる。この点は、フィリピンに関する記述から、鮮やかに浮かびあがる。

まず第一に、「エピローグ」が太平洋戦争理解において、フィリピンに対する加害の認識に到っている点は特筆すべきである。その一方で、日本がフィリピンに与えた損害がアメリカのそれとの比較において語られる点、日米関係と米比関係に記述の重心を置いた上で太平洋戦争の意味づけがなされる点などは、作品の語り、アメリカ抜きでは日比関係の歴史に向き合えずにいることを示しているように思われる。加えて、作者の発言からは、アメリカによる「占領」という同じ歴史を背負うものとして日本とフィリピンを描くなかで、フィリピンへの同情が生れた側面があることも窺われる。こうしたことは、直接にはアメリカの極東政策を軸足におく記述スタイルに因ると考えられるが、実はそのような記述の在り方こそ、作者の歴史認識の本質に触れているのではないか。

即ち、大岡のフィリピン理解には常にアメリカという軸が介在している。このような『レイテ戦記』の語りを包み込んでいるのは、取りも直さず、太平洋戦争後の東アジアが冷戦体制へと組み込まれたことによる、自由陣営対社会主義陣営という対立軸である。これにより戦前の支配被支配の対立構図が問われることなく、日本がアジアと直接向きあうことのなかった歴史的展開としての〈冷戦〉の時空間である。それは『レイテ戦記』以前の大岡の作品において、アメリカが日本の現代史を担う主軸として現れ続ける一方、日本の対アジア関係が問われることがなかったこととも、決して無関係ではないだろう。『レイテ戦記』の語りは、このような冷戦期アジアの構図に規定されながら、アメリカの極東政策を突き詰めることで〈冷戦〉の時空間を明らかにし、そのなかでフィリピンという「アジア」認識に到った。この点に、冷戦期に現われた戦争語りとしての特異性が認められると考える。

結びにかえて

本報告では、占領直後にロックフェラー財団支援による米欧留学を通して〈冷戦〉の場を生きた大岡が、文学の語りのなかで「戦争」と〈冷戦〉とを結びあわせつつ記憶していることに注目した。冒頭で述べたアメリカ・イメージの文脈に戻るなら、軍事的なアメリカの記憶の語り直しとも取れるこの「再記憶化」の試みは、その批評性と限界の両面において、〈冷戦〉がつくりあげた東アジアの時空間が、戦後の歴史認識に深く絡みあっていることを示している。〈冷戦〉の磁場に逆行しながら、一面そこに引き込まれてしまう大岡の試みを、アメリカによる文化冷戦と並置することで、文学が、共同体の集合的な記憶をめぐる日米双方の力が働く闘争の場でもあったことがみえてくると思われる。

東京南部労働者サークルの文学世界

—1950年代の都市空間と労働者文化—

山本唯人（東京大空襲・戦災資料センター）

近年、1950年代に発行された文学サークル誌の復刻やそれをもとにした文学サークル運動の研究が進められている。本稿は、東京南部と呼ばれる東京都品川・大田・港区などの労働者街を中心に活発な運動を展開した「下丸子文化集団」とその周辺に誕生したいくつかの文学サークルに着目し、敗戦後の焼け跡から復興へと向かう同時代の都市空間や労働世界の変容と関わらせながらその意義を考察しようとするものである。

第1に、このジャンルの本格的な研究は、まだはじまったばかりであることを強調したい。国民文学論やルポルタージュ論、生活記録運動など、この時期の文学サークル運動を前提にした文学理論や文学批評を扱う研究はあったが、資料的な制約もあり、サークル運動を通じて紡がれた「文学」の内実そのものを検討することは難しかった。

東京南部については、2003年ごろから、浜賀智彦氏や城戸昇氏、井之川巨氏など、1950年代当時サークル運動に参加し、その後散逸しがちなガリ版刷のサークル誌を大量に収集保管し、その意味を追求してきた方々と研究者との出会いがあり、2003年、その読解を目的とする研究会（文化工作隊研究会）が設立された。

この研究会の成果が、2007年12月、『現代思想』臨時増刊・総特集戦後民衆精神史（第35巻第17号）として刊行され、2009年、主要な文献が『東京南部サークル雑誌集成』（全4冊、不二出版）として復刻された。特に道場親信の「下丸子文化集団との

その時代」(『現代思想』臨時増刊第35巻第17号、2007年)、「無数の「解放区」が異なる地図を作りだしていた時代」(『東京南部サークル雑誌集成』解説・解題・回想・総目次・索引 不二出版、2009年)によって、東京南部サークル運動の結節点の役割を果たした「下丸子文化集団」(のち「南部文学集団」「南部文化集団」と改称)の通史的概要、理論的リーダーの1人であった江島寛の文学理論が読解された。

また、道場親信と鳥羽耕史によって、「下丸子文化集団」と関わりの深い『人民文学』元発行責任者・柴崎公三郎氏へのインタビューがまとめられた(「〈証言と資料〉文学雑誌『人民文学』の時代—元発行責任者・柴崎公三郎氏へのインタビュー」『和光大学現代人間学部紀要』第3号、2010年)。

本稿では、こうした研究の深まりを受けて、特に、1952年から54年ごろ、朝鮮戦争に対応する政治運動の高揚が退潮し、自らの生活や労働の場に目を向ける詩が現われてきたとされる時期(城戸昇)、「下丸子文化集団」の周辺に生まれた3つのサークル誌(『油さし』『いぶき』『戸越』)に着目し、この時期のサークル運動の課題や切り開かれた文学世界の意味を考えようとした。

第2に、サークル運動の研究を進める上での課題は、方法論の問題である。サークル誌には一般の人々が膨大な作品を発表するとともに、制度化された文学世界に見られるように、作品を位置づけるための社会的に組織された批評の枠組みが存在しない。こうした、文学と社会の中間的な領域に生産された言説を位置づけるための適切な方法論や理論的枠組みが必要になる。

本稿では、その1つの試みとして、ブルデューによる「文学場」の理論を参照しながら、港区芝浦職安を拠点に発行されたサークル誌『いぶき』を題材に、3つの観点から、サークル運動の位置取りを探ろうとした。

①主にプロの作家や批評家によって供給される、文学サークルを幅広い文学市場のなかで位置づけるための文学理論である(意味づけ・象徴財の供給)。具体的には、国民文学論やルポルタージュ論、生活記録運動、作家・批評家などの間で行われる文学論争などがその役割を果たした。②サークル運動の結成動機となるような出来事、労働・生活世界の変容である(都市空間・労働世界の変容)。『いぶき』においては、朝鮮戦争下での港湾労働、社会保障費の大幅削減などが創刊の動機となった。労働者たちが資本の監視から離れて、自由に語ったり交流したりするための時間・空間が、集団の形成や合評会の開催、共同的な媒体の製作を通じて物質化され、組織化される。③制度化された文学世界と労働・生活の場を媒介するものとしての運動世界。社会運動と文学運動が複雑に交錯しあいながら、そのどちらとも完全には一致しない独自の価値を持つ豊穡な言説・表現世界が展開される。サークル運動はこの領域を通じて、制度化された文学世界から象徴財(文学理論)を獲得・咀嚼し、日常言語を「作品」

として研ぎ澄ませていくと共に、生きられた労働や身体的経験を参照することで、制度化された文学と社会の関係に絶え間ないゆらぎをもちこみ、その「再定義」を突き付ける（文学の「定義権」という視角について、佐藤泉『戦後批評のメタヒストリー』岩波書店、2005年、p.21の指摘を参照）。

本稿では、東京南部におけるサークル運動の社会的世界を、このような実践を通じて形成された「重層的な文化生産システム」という観点から描こうとした。サークル誌に集合化された言説・表現は多層的であり、当面の間、具体的な作品とそれを生み出す主体、背景となる文学・社会状況の間を往還しながら、方法論や理論的フレームワークを模索する試行錯誤が求められるだろう。

第3に、「下丸子文化集団」と3つのサークル誌から見えてきた、1950年代前半の歴史的位相やそこから出てくる論点をまとめたい。

①「下丸子文化集団」では、1952年11月ごろから、従来の「同人誌的な偏向」を廃し、幅広く「大衆工作」を行うことで、「大衆によって書かれ、大衆によってつくられる」雑誌を目指す「大衆路線」が自覚的に打ち出された。これに伴い、集団名も米軍管理工場の拠点である「下丸子」から「東京南部」全体を意識した「南部文化集団」へと改称された。機関誌『南部文学通信』（『下丸子通信』改題）は、南部で活動するサークルの報告や作品を掲載して交流の結節点となる役割を果たした。

こうした路線が、制度化された文学世界や地域空間のなかから資源を結集できた背景には、朝鮮戦争の勃発によって内部／外部の自明性がゆらぎ、生活や労働の場を通して東アジア全体のなかでの位置取りを意識させられるような社会的空間が開かれたこと、また、こうした状況への対応をめぐる、『新日本文学』と『人民文学』への文学運動の分裂があり、「文学的なもの」の境界も揺れ動いていたことが挙げられる。

「大衆路線」は過度な政治主義と評されることが多いが（典型として本多秋五『物語戦後文学史』の指摘）、この時期のサークル活動の実態は、必ずしも末端まで党の指導が貫徹していたわけではなく、その意義や現実に果たした役割については、個別のケースに即して検証し直していく必要がある。

②麻布古川橋界隈で創刊された『油さし』（1952-54年）との交流は、江島寛をはじめ下丸子文化集団の人々にとって、「大衆路線」が提起する問題を、町工場労働者や作品への具体的な応答を通して鍛え上げていく場になった。このことは、サークル運動を1つだけ取り出して分析するのではなく、同時代に並存していた複数のサークルや他者との交流を全体として取り上げ、そのなかにおける表現手法や文学理論の意味を検討する必要性を示唆している。

③『いぶき』（1954-55年）は、芝浦職安に集まる日雇労働者を中心に、1954年、戦後の画期をなす社会保障費削減反対運動をきっかけに創刊された。オルガナイザー

の城戸昇は、毎号、批評家・赤木健介などの作品批評を掲載する一方で、「わたしたちは専門的な意味での作家や詩人になること」が目的ではないとはっきり立場を示し、地元の芝診療所などからも支援を得て、活動を展開した。

城戸昇は、制度化された文学世界や地域から適度な距離を置きながら資源を引き出し、毎号 30・50 ページ、8 号までという持続性・安定性を確保することに成功した。城戸昇はこの時期の交流をきっかけに、下丸子文化集団の中心的なメンバーになっていく。

④『戸越』（1954・55 年）は品川区戸越の町工場街を拠点に創刊された。『戸越』は「ルポルタージュ特集」（第 2 号）、「生活記録特集」（第 5 号）など、文学理論に呼応した誌面作りを行った。『戸越』で注目されるのは、一般の人々が寄せた作品のなかに、品川・大田区界隈の観光開発や大井ふ頭の整備に対する期待などが表明されていることである。

こうした意識は、1960 年代以降、企業社会や高度成長のシステムが本格的に形成されると、そのなかに吸収されていってしまうものである。

このように、サークル運動とは、人々の労働や生活の場を揺るがす出来事に対応しながら、制度化された文学世界や地域空間のなから象徴的・物質的資源を引き出し、国家や資本の制約から自由な文化生産の空間を創造する過程として捉えることができる。同時代的に結成された複数のサークルは、相互に固有の時空間的位相を持ちながら、複雑なネットワークを通じて参照し合い、そのネットワーク的な関係に「名前」を与えることで独自の社会的空間を形成している。「東京南部」とは人々が生き働く現実の地域に与えられた名前であると同時に、「文学」のネットワークを通じて想像的に構成された社会的世界の名称として捉えることができるだろう。

1950 年代前半は、朝鮮戦争を契機とする労働世界・都市空間の変容と制度化された文学世界の揺らぎに規定されながら、ネットワーク的に形成された文学世界の意味を深める多様な実践が行われた時期として捉えることができる。

残された膨大な言葉を読み解きながら、それらを、垂直的・水平的な「文学」のネットワークを通じて形成された社会的文脈のなかに置きなおし、〈1950 年代〉が可能にした文化空間の可能性とその後失われていったものの持つ意味を検討することが今後の課題になるだろう。

第 25 回研究会参加記

酒井晃（明治大学・院）

2010年7月10日、立教大学で開催された第25回同時代史学会定例会の共通テーマは「戦後文学の精神史」であった。報告者・論題名は、梶尾文武「1960年代における新右翼の形成と表象—大江健三郎から三島由紀夫へ—」、金志映「〈冷戦〉の磁場と『アメリカ』—大岡昇平の冷戦期の軌跡と『レイテ戦記』を中心に—」、山本唯人「東京南部労働者サークルの文学世界—1950年代の都市空間と労働者文化」であった。コメンテーターは矢崎彰氏、島村輝氏がおこなった。

私は文学作品に詳しいわけではないが、戦後文学から時代を読み解く報告が組まれていると考え定例会に参加した。なお当日は時間の関係もあり、あまり討論らしい討論はなされなかったため、矢崎・島村両氏がおこなったコメントを紹介しつつ、私が感じた点を記したいと思う。

梶尾報告では、大江健三郎・三島由紀夫の文学テキストから新右翼の表象を分析し、それらが同時代の新右翼の表象と異なり、天皇を基盤としたものであった点に着目した。評論家の言説と対比させつつ、「文学と政治」について報告をおこなった。コメントでは、同時代に起きた事件と文学テキストの関連、三島が新右翼（運動）にどう受容されたかといった文学と社会の同時代的つながりについて多くの発言がなされた。私は大江がセクシュアリティをメタファーに新右翼を語っており、「自讀」をおこなう新右翼の主人公がマッチョな男性像へと変貌していく点は、野坂昭如の小説や評論と比較すれば単純に面白いと思った。

金報告は大岡昇平のアメリカ留学と『レイテ戦記』の分析をおこなった。アメリカ留学はロックフェラー財団の資金を活用しており、アメリカの冷戦戦略と大岡の思想の連関を指摘した。『レイテ戦記』は初出とその後単行本になった際の物語は異なり、フィリピン（人）やアメリカの見方に変化が生じていたことも明らかにされた。報告者はフィリピンを「アジア」と読み替え、日本／アジアの戦時—戦後の状況を〈冷戦〉という切り口から読み解いた。コメントでは、①大岡の他の作品から「アメリカ」を読み解くことの可能性、大岡の戦争体験と『レイテ戦記』の関連といった大岡自身への言及、②アメリカ留学をおこなった他の文学者や評論家との比較、③知識人にとって「アジア」とは何であったか、その認識とは何であったかなどの意見や質問が出た。とりわけ③は重要で、「アジア」という言葉や概念の歴史的な変遷とともに、大岡にとってフィリピン、「アジア」とは何であったかをもう少し深く聞いてみたかった。

上記2本の報告は文学作品から新たな視点を提供し、テキストの読みを広げた点に

意義がある。戦後文学ではあまり顧みられなかった問題に問いを立て、戦後の政治や文化を文学の立場から捉え返したものであった。ただ戦後文学そのものの境界が今日では揺らいでおり、山本報告はその点で従来の戦後文学（あるいは戦後社会）では抜け落ちてしまったサークル運動の詩や評論を取り上げ、戦後社会と文学の再検討へと論を進めていった。

山本報告では、1950年代前半に「東京南部」地域で形成されたサークル運動の詩や評論を取り上げ、高度成長以後とは異なる社会編成原理を探って分析がおこなわれた。報告は文学者や左翼運動などがサークル運動に対して協力や緊張関係を示し、詩を書くことの意味に多くの時間を費やしていた。コメントでは、サークル運動（社会運動）の戦前から戦後への連続と断絶、運動の退潮と高度成長との関連、詩という形式について意見が出されたが、私が感じたのは文学の持つ領域や特性について考えさせられた。

3報告は戦後文学の内実やカテゴリーを問いかけるものである一方、共通テーマである「精神史」からは遠く離れているように私は思った。定例会の冒頭に司会者が述べていたかもしれないが、私なりに考えてみると、3報告は1950年代～1970年代初頭の戦後文学から戦後社会を扱い、それぞれ領域が異なる「精神」（時代的雰囲気や人々のありよう？）を提示し、その可能性と限界へと議論を開こうと企画された委員の方は考えたのではないだろうか。しかしながら、フロアーや司会者等から今回の共通テーマについて時間の関係上やむを得なかったが、「戦後」・「文学」・「精神史」の検討や中間総括めいたものがなかったのは残念であった。無論、3報告が個別におこなっていた議論を無理やり関連させて位置づけようとするのは乱暴であろう。

また3報告は戦後社会と文学作品のつなげ方について、いずれも苦慮していたように思えた。文学の叙述や形式や世界（観）をどのように戦後社会に結びつけるか。文学を単純に大文字の「歴史」や「社会」に合わせることはないだろう。おそらく文学の定義や読みが変化することは社会や歴史の捉え方が変容することでもあり、あらためて文学と社会・歴史の捉え方や位置づけが焦点になっただろう。

最後に、定例会に関するアンケート調査がなされた点に触れたい。今回25回目ということもあり、委員の方からアンケート用紙が配られ、参加者の要望をすくい上げようとしていた。委員の方たちが魅力ある学会にするために参加者から意見を募り、双方向的な場にしようとする努力に賛意を示したい。

・会則の付則にありますように、会計年度は4月～翌年3月となっております。2009年度会費の納入をお願い申し上げます。また2008年度までの会費が未納の方がいらっしゃいます。未納の方は相当額を郵便振替にてお支払いいただきますようお願いいたします。

会費は、年額で、一般の方5000円、院生の方3000円です。

郵便振替 **口座番号00120-8-169850**

加入者名 **同時代史学会**

なお、お支払いいただいた振替用紙をもって領収証にかえさせていただきますので、ご了承ください。

また、住所などにご変更のある場合は、振替用紙にその旨をご記入ください。よろしく願い申し上げます。

同時代史学会 2009～2010 年度役職者一覧

代表：浅井良夫

副代表：植村秀樹

理事

浅井良夫、安達宏昭、荒木田岳、井川充雄、池田慎太郎、伊藤正直、植村秀樹、梅崎透、及川英二郎、岡本公一、菊池信輝、小林知子、進藤兵、高岡裕之、豊下梢彦、永江雅和、中北浩爾、中野聡、西野肇、原山浩介、兵頭淳史、玄武岩、平井一臣、三宅明正、安田常雄、吉田裕、若林千代

会計監事

吉川容

研究会委員

吉田裕、及川英二郎、岡本公一、進藤兵、高岡裕之、中野聡、川口悠子、斉藤伸義、佐治暁人、千地健太、土屋和代、豊田真穂、根津朝彦、長谷川亮一、松田春香、和田悠

編集後記

先ごろ、日本学術振興会より「育志賞」なるものが創設されたので候補者を推薦せよとの通知が、各大学院と学術会議協力学術団体に届きました。「育志賞」とは「天皇陛下の御即位20年に当たり、社会的に厳しい経済環境の中で、勉学や研究に励んでいる若手研究者を支援・奨励するための事業の資として、陛下から御下賜金を賜り」、「このような陛下のお気持ちを受けて」、「将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することで、その勉学及び研究意欲を高め、若手研究者の養成を図ることを目的として」創設されたものだそうです。

よく知られているように、現政府は「事業仕分け」という名の下に若手研究者の育成資金を大幅に削減しています。その一方で、天皇「陛下」の「御下賜金」によって若手研究を「養成」するなど悪い冗談としか思えないわけですが、そもそも、この「御下賜金」なるものが天皇の私的な金銭なのであれば、そのような資金による賞の創設や運営に日本学術振興会が携わるといふことの法的な根拠が問題となります。あるいはこれが私的な金銭ではないとすれば、憲法違反の疑いを免れません。

しかし何より憂うべきことは、「民主的」といわれるような研究者を会員に多く抱える伝統ある学会も含めて、人文・社会科学系の学会のほとんどからこのような賞に対して何ら抗議・非難の意志表示がなされることもなく、それどころか推薦制度の整備といった形で積極的に呼応するような学会まで現れていることです。たとえば1950～60年代であれば考えられなかったこのような状況は、日本の人文・社会科学からいかに批判的な精神、学問の自由を尊ぶ精神が喪失し、権威や制度を無批判に受容する姿勢が浸透しているかを示すものです。

そして、そのような外の権威に対して盲従するような姿勢は、内なる権威主義や、相互批判・論争する精神の衰退とも結びついているとすれば、きわめて由々しき事態であると言えるでしょう。われわれの中に、例えば学界で「権威」とされる学説や有力説への異論・少数意見が提示されたとき、議論を回避して巧妙に排除する、あるいは「権威」を笠にきて高圧的に撤回や修正を迫るといった形で決着を図る、といった姿勢が生まれてはいないでしょうか。こうした姿勢に対して自戒しえない者は、研究者であれなんであれ社会科学や歴史研究に関わる資格はないと言わねばならないでしょう。

(兵頭淳史)

同時代史学会 News Letter 第17号

2010年11月15日発行

発行：同時代史学会事務局

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1

専修大学経済学部 永江雅和研究室

Tel 044-911-0564 / Fax 044-900-7848

nagae@isc.senshu-u.ac.jp